



次期作のための土づくり

大豆を連作すると地力は衰え、収量が減少します。なので、多収のためには土づくりが重要です。農閑期のうちに対策を取りましょう。

地力を高めましょう！

大豆は窒素を多く吸収します。下の表にあるように、そのうち7割ほどは根粒由来ですが、残りは「土壌」から供給されます。さらに、畑状態にすると有機物の分解が促進されるので、連作すると地力は衰え、収量が減少します。作付け前に、堆肥を1～2t/10a施用し、地力を維持しましょう。

大豆地上部の肥料・土壌・根粒由来の窒素吸収量(農業技術体系より)

生育時期	肥料由来N	土壌由来N	根粒由来N	合計
	kg/10a	kg/10a	kg/10a	kg/10a
出芽～黄葉期	0.15 (0.5%)	8.37 (25.3%)	24.52 (74.2%)	33.04 (100%)

注)元肥N: 1.6kg/10a(肥料利用率10%)、収量480kg/10a

pHを中性に保ちましょう！

大豆は酸性を嫌います。特にpH5.5以下の酸性土壌では根粒菌の着生が少なくなり、減収します。土壌診断で圃場の状態を確認し、pH6.0～6.5を目標に調整しましょう。

なお、土壌診断は、JA窓口を通じ、JA全農おおいだ土壌診断センターで行っています。土壌診断結果により資材の量を決めましょう。

pH6.2を目標とした炭カルの施用目安(kg/10a)

土壌の種類	土壌のpH			
	<4.0	<4.5	<5.0	<5.5
火山灰土壌	500※	350※	200	100
粘質～壤質土壌	350※	250	150	70
砂質土壌	200	150	100	50

注)施用上限は反当300kgとし、超える場合は何年かに分け施用しましょう。なお、炭カル以外の場合は次の係数を掛け施用してください。

※ミネラルG、ケイカル→1.18、苦土石灰→0.96

深く根が伸ばせる環境が大事！

作付け前にサブソイラやプラウなどで硬い耕盤を壊すことで、根を深く伸ばせるようになり、生育後半の干ばつにも強くなります。また、排水もよくなり湿害を回避できます。